



居場所があれば

今週の月曜日は小学校の振替のお休みのようで、朝から幼稚園の庭は賑やかでした。小学生たちが弟や妹たちと一緒に登園です。「おはよう！」と当たり前のように、挨拶を交わしていく子、照れて少し伏し目がちに頭だけをちょこっと下げていく子。大きくなってこようやって当たり前に来てくれることが、なんだか嬉しい朝です。卒業生だけではなく、愛隣を卒業していない兄弟たちも同じようにやって来てくれます。その兄弟たちも、顔見知りになるとなんだかみんな卒業生に見えてきてしまいます。それだけではなく、振休でない日にも、小学生たちが、我が家に帰ってきたかのようにやってきます。中学生、高校生の中には1年に数回、近況報告に寄ってくる子もいます。もちろん、親たちもちょくちょくやってきます。みんなひとしきりおしゃべりをして、少しすっきりした顔で帰っていきます。いつでも帰ってこることができる場所、そんなふうに思ってもらえているのでしょうか。だとすれば、こんなに嬉しいことはありません。

保育の中で子どもたちを見ていると、幼稚園の中に安心できる居場所があることの大切さを感じます。春、「やだー、ママがいいー、かえる！かえるよー！」そう言って泣いたり、部屋の隅で固まって動かなかった子どもたちがいました。少しして、安心できる仲間や先生、好きなあそびが見つかる涙が止まり、何事もなかったかのように笑顔で幼稚園中を走り回るようになりました。幼稚園の中に自分の居場所があるという安心が一步踏み出すエネルギーになります。しかし、大きい組になって毎日仲間と幼稚園中を走り回っているような子にも、“ここに居場所がない”ということがあります。その様子をよくよく見ていると、あそびに集中できていなかったり、どこか自信がなかったりするのわかります。そんな時には年少の頃のようにもう一度先生とその子だけのあそびを作ることがあります。ここが居場所と思える空間と時間を保障するのです。そのことを子どもと一緒に確かめます。安心できる居場所ができると子どもはまた、仲間の中に戻りあそびに集中し自信を回復していきます。

幼稚園を卒業したあとも子どもたちはしばしば同様の事に出くわします。早い子どもでは小学校の中学年頃から親との衝突が始まります。うるさい、どうせわかってもらえない、家の中には自分の居場所がないと感じます。親はいつでも子どもの話を聞きたいと思っていますが、それがうまくいかない時がしばらく続きます。(我が家がそうでした。) そんな時、親以外に子どもが安心して話ができる大人の存在があったらと思います。学校では仲間の中に起こるいざこざや、最悪の場合はいじめに巻き込まれていく子どもたちがいます。安心できる居場所が学校の中にありません。学校以外の所に仲間がいたらと思います。親以外の大人、学校以外の仲間、そこに居場所があれば子どもは救われる。自分という存在を他者との関係の中で確かめて、自分はいいと思えたら安心して前に進むことができると思うのです。「愛を積む人」という映画を観ました。あ石堀を作る手伝いをする青年は、窃盗を企てる仲間の共犯となって、主人公の家に盗みに入ります。後日、逮捕され雇い主からは解雇を言い渡され住む家も失います。学校も中途半端、悪い仲間と警察の厄介になる生活の繰り返し、定職についても足を洗えず同じ過ちを繰り返す。今度こそ自分はどこにも居場所がなくなったと自暴自棄になった彼に、主人公は「ここに居てくれないか。」と切り出します。信じられない言葉に青年は救われます。ここに私の居場所がある。それは人が明日を生きる希望になります。一人ひとりに居場所が必要です。そして誰もが誰かの居場所になることができます。